

## 平成 29 年度 【 学園研究費助成金 &lt; B &gt; 】 研究成果報告書

学部名 文化情報学部

フリガナ ミタ タカアキ  
氏名 見田 隆鑑

研究期間 平成 29 年度

研究課題名 梶山歴史文化館における展示資料の活用とその展示効果に関する研究

## 研究組織

	氏名	学部	職位
研究代表者	見田隆鑑	文化情報学部	准教授
研究分担者			
研究分担者			

## 1. 本研究開始の背景や目的等 (200 字～300 字程度で記述)

本研究は、梶山歴史文化館に現在展示されている資料の展示方法の見直しや改善を行うことを通して、学生の教育の場としての歴史文化館の展示効果にどれくらいの変化が現れるのかを研究することを目的とするものである。梶山歴史文化館には学園の歴史を伝える貴重な歴史資料（原資料）が豊富に展示されており、それら一つ一つは学園のあゆみを示す貴重な資料であるが、これまで自身の学芸員課程の授業で行ってきた学生の展示評価を見ると、いくつか展示方法を改善することにより、その展示内容がより理解されやすくなる部分があるように思われた。本研究では、学生たちの展示評価も参照しながら梶山歴史文化館の展示改善を試み、その取り組みがどのくらい実際の展示効果に変化をもたらすのかを実証的に研究するものである。

## 2. 研究の推進方策 (300 字程度で記述)

梶山歴史文化館の展示評価は、研究代表者が担当する博物館概論（1）、（2）の授業内容に含まれており、平成 29 年度も計 124 名の受講学生を対象に展示評価を行ってもらった。その中では雛型に関係する体験型のイベントを行う、触れる展示物や模型を充実させる（例：昔の糸菊や日誌を手にとれる、金剛鐘の模型を置くなど）、VR やクロマキーを使った説示方法の改善など様々な意見があり貴重な意見を集めることができた。この中から本研究を通して改善を試みる対象として「金剛鐘」に関わる展示の充実化を目的とすることにした。当初は、立体的な模型の制作を目指し、7月に金剛塔の見学・撮影を行った。しかし、専門業者の見積りでは予算内での模型の制作は厳しく、代わりにパネルで現在の金剛鐘の姿と、生徒が演奏する姿を作成することにした。次年度の展示評価でこのパネルの設置による展示効果を確認する。

### 3. 研究成果の概要 (600字～800字程度で記述)

本研究では、椋山歴史文化館の展示改善として「金剛鐘」に関わる展示方法、説示方法の改善を試みることにした。当初は“金剛鐘＝カリヨン”の仕組みについて理解を深めることができるような模型の制作を目指した。現在、展示室に設置されている解説パネルには、鐘と生徒の演奏風景が重なるような写真が掲載されており、言葉での説明はあるものの、金剛鐘とは具体的にどのようなものなのかをイメージしにくいと思われたからである。7月に研究代表者が金剛塔に入り、その構造の調査と写真撮影を行い、業者に模型制作の見積りを依頼したが、縮小模型でも予算内では仕事を受けてくれる業者を見出すことができなかった。この為、立体的な模型は断念し、①金剛鐘の鐘が連なる姿と②生徒による鍵盤の演奏風景を耐久性のあるパネルで制作することに方向転換した。歴史文化館の施設の一部である旧金剛塔は、かつて金剛鐘が設置された建物そのものでもあり、演奏風景のパネルを置くことで、この建物とともにカリヨンとしての金剛鐘の姿に学生がイメージを膨らますことができるような展示にもつながると考えられた。また、正式記念室の場所が分かりにくい、気付かないなどの意見も毎年の展示評価で見られることから、入口から演奏風景のパネルが見えることで中に入ることへの意識を向けさせる効果も働くものと考えられ、また螺旋階段を上った正式記念室にカリヨンのパネルを設置することで、鐘と鍵盤・演奏者との距離感を意識させ、また鍵盤からのびるワイヤーの先を追って上の階へ登ることへの意味づけにもつながるものと考えられた。代表者が担当する「デジタルアーカイブ論」の授業でも60名程の学生を対象に、金剛鐘についてどのくらい理解しているかを確認するアンケートを行ったが、普段からあまり意識して聴いている学生は少なく、演奏方法なども具体的にはわからない学生が多く見られた。このパネルの設置による効果に関しては次年度の授業で行う展示評価の中でその成果と課題を確認していきたいと考えており、本研究の内容と成果を整理し、文化情報学部の紀要に論考を投稿したいと考えている。

### 4. キーワード (本研究のキーワードを1項目以上8項目以内で記載)

①椋山歴史文化館	②金剛鐘	③カリヨン	④展示評価
⑤展示改善	⑥展示効果	⑦	⑧

5. 研究成果及び今後の展望 (公開した研究成果、今後の研究成果公開予定・方法等について記載すること。既に公開したものについては次の通り記載すること。著書は、著者名、書名、頁数、発行年月日、出版社名を記載。論文は、著書名、題名、掲載誌名、発行年、巻・号・頁を記載。学会発表は発表者名、発表標題、学会名、発表年月日を記載。著者名、発表者名が多い場合には主な者を記載し、他〇名等で省略可。発表数が多い場合には代表的なもののみ数件を記載。)

本年度の研究成果は、次年度の『椋山女学園大学文化情報学部紀要』に投稿を予定している。また、本研究の中で外注制作した展示資料(写真パネル)2点、および金剛鐘の仕組みに関して研究代表者が制作した解説パネル1点については、椋山歴史文化館の正式記念室入口の螺旋階段下と、正式記念室内に設置し、今後活用が図られる。